

令和元年6月23日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13183

研究課題名(和文)世界諸地域の大衆音楽における「日本」表象の関係史的研究

研究課題名(英文)Study of the representation of "Japan" in popular music in the world

研究代表者

輪島 裕介(Wajima, Yusuke)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50609500

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：東アジアと北米を中心に、20世紀後半以降の大衆音楽における「日本」の表象について総合的に研究した。特に、2017年に半年台湾に滞在し、1950～60年代の日本の大衆歌謡の伝播の過程と、80年代後半以降、それが対抗文化的な観点からリバイバルしていった過程について知見を得た。また、インターアジアポピュラー音楽グループや国際ポピュラー音楽学会で研究発表を行い、台湾、韓国、中国、シンガポール、アメリカ、オランダなどの研究者と研究ネットワークを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界各地の大衆音楽の中で「日本」が表象される仕方を比較研究し、少なくとも環太平洋圏で、それぞれの文脈を伴って同時代的に受容され、ローカルな音楽実践と相互作用してきたことを明らかにした。そのことは、しばしば考えられがちのように、日本の大衆音楽が、単なる米英の主流的ポップ音楽の模倣でも、一国のなかで完結したドメスティックなものでもなく、20世紀後半における大衆文化の国境を越えた伝播のネットワークの中に位置づけられるものであることを明らかにし、より実証的かつ建設的な大衆文化をめぐる対話の可能性を拓くものである。

研究成果の概要(英文)：I researched comprehensively the representation of "Japan" in popular music from the late 20th century, focusing especially on the East Asia / Pacific area including the US. In particular, during my research visit in Taiwan for half a year in 2017, I investigated intensively the process of the spread of Japanese popular songs in the 1950s and 60s in East and Southeast Asia and their revival in the context of the counter culture since the late 80s. In addition, I presented papers in the international conferences such as the Inter-Asian Popular Music Group and the International Society for the Study of Popular Music to establish a close network with researchers from Taiwan, Korea, China, Singapore, the United States, the Netherlands, and so on.

研究分野：ポピュラー音楽研究、民族音楽学

キーワード：ポピュラー音楽 グローバル化 ローカル化 文化変容

## 1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで、近代日本の大衆音楽についての歴史的研究を行ってきた。著書『創られた「日本の心」神話』では、通念的に「日本的」とされる音楽ジャンルである「演歌」の形成過程について、1960年代後半の対抗文化的思潮との関連に注目して詳述した。また、著書『踊る昭和歌謡』においては、外来ダンス音楽の輸入と土着化の過程を通じて、新たな視点からの日本大衆音楽史を提示した。また、科研費(若手B)研究課題、「戦後日本大衆文化における放送と音楽」(平成25~27年度)では、放送の主体的な大衆音楽制作機能に着目した。これらを通じて、日本国内の文脈に即した大衆音楽史については一定の全体的な像を提示しえたと考えている。しかし、英国で刊行された、非英語圏のポピュラー音楽についての国/地域別の論文集シリーズ Routledge Global Popular Music Series の日本編に寄稿し、その論文が台湾で翻訳されたことや、国際ポピュラー音楽学会をはじめとする国際会議での発表と議論を通じて、トランスナショナルな関係性のなかで日本の大衆音楽の歴史的展開を位置づける視点を模索しはじめた。そこで、既に断片的に知見を得ていた、国外の大衆音楽における「日本」の表象(日本製の音楽の国外での受容と、国外で制作された「日本らしい」音楽の双方を含む)の問題と、それが日本の実践及び言説の形成にフィードバックされる仕方について、包括的な研究を行うことを着想した。

## 2. 研究の目的

本研究は、概ね第二次世界大戦後の日本内外の大衆音楽において、「日本」がどのように表象されたかを、相関的な視点から読み解くための基本的な視点を獲得し、国際研究ネットワークを構築することを目指す。具体的には、日本国外において、オリエンタリズム的なステレオタイプを伴って表象された「日本」のイメージが、日本国内において、どのように内面化され、再生産されたか、という点に注目する。仮説的に、3つの歴史的区分(それぞれ戦後占領期の日米関係、高度成長期以降の科学技術と経済進出、1990年代以降のマンガ、アニメ、ビデオゲームなどの視覚文化、によって特徴づけられる)を設定し、そこにおける規範的なイメージを抽出することで、「日本」表象の歴史的変遷を提示し、さらに、日本に関連する事例にとどまらず、大衆音楽における「他者」表象を相関的かつ総合的に捉えるための分析枠組を模索する。

## 3. 研究の方法

仮説的に以下の3つの段階を設定し、年度毎に、それぞれの段階に対応した資料研究とコンテンツ分析を行い仮説の可否を検証する。各段階は、1)戦後占領期から高度成長前期までの日米関係に枠付けられた「エキゾチックで従属的な他者」としての日本と「旧宗主国」としての日本の相関、2)高度経済成長後期からバブル期までの先端的科学技術のイメージと経済進出に対する脅威と魅惑、3)1990年代以降の日本製視覚文化の世界的拡散と結びついた、「オタク」や「カワイイ」を鍵概念とする表象、である。並行して、国際学会での研究発表を中心に関連研究者との国際的ネットワーク構築を行う。

なお、2017年度前半に、半年間、台湾大学音楽学研究所に滞在することになったため、事例研究の中心を、台湾を中心とする東アジア圏に集中することとした。特に、1950年代から60年代における台湾語(福建語系ミン南語)への翻訳を介した日本の歌謡の広範な受容と、台湾語(ミン南語)を介した東南アジア華人ネットワークへの伝播について、録音資料や文献を広く渉猟すると同時に、当時から活躍していた音楽家や、そのリバイバルにかかわっている音楽業界関係者への聞き取り調査を行う。さらに、「混血歌」と称されるそれらの日本の流行歌の台湾語カバーが、1980年代以降の台湾語と台湾土着文化の復権をめざす対抗文化的な運動の中で、新たな文脈で再解釈・再評価されていった過程について、レコードレーベル主宰者やライブハウス経営者など、そうした運動の中心にいた人物への聞き取り調査を中心に研究を進める。

## 4. 研究成果

初年度である2016年には、アメリカの有力なポピュラー音楽研究者・民族音楽学者であるケヴィン・フェレス氏(コロンビア大学、当時助教授、現在准教授)を招聘し、20世紀初頭から現在に至る、アジアとアメリカ(とりわけ西海岸)を含む環太平洋的な相互影響のネットワークに関するシンポジウムを行った。そこで、当初本研究が前提としていたナショナルな単位の関係よりも、各都市のローカルな音楽文化が環太平洋的な関係のなかで結びついてゆく過程を重視する研究の方向性がさらに明確に設定された。そこで、移民、植民地支配、米軍の覇権といった社会的・政治的要因への注目についても改めて確認された。そうした観点から、「大阪」という場所に注目した論文「大阪の永六輔」を発表し、1960年代の文化運動とメディア編成と

フィリピンを媒介とする「ドドンパ」と呼ばれるダンス音楽の受容と変容の相関について検討した。さらに、日本ポピュラー音楽学会全国大会において、大衆音楽のトランスナショナルな形成と拡散の歴史に関するラウンドテーブル「初期電気録音時代における世界音楽地政学」を企画した(12月15日、於立教大学。登壇者は大和田俊之、高橋聡太、葛西周の各氏)。これは、1920年代における植民地港湾都市の音楽実践と音楽産業の結びつきに注目する Michael Denning の著作、Noise Uprising に触発されたもので、そこで言及されている大西洋圏、地中海圏、太平洋圏の都市間ネットワークに関する議論を、本研究の問題関心にひきつけ、特に環太平洋的な関係性の中で1930年代における日本のポピュラー音楽文化の成立について検討し、その視点を現代にいたるまで拡張するための理論的な枠組みを模索した。

2017年度には、上述のように台湾大学音楽学研究所に滞在し、戦後の台湾における日本歌謡の台湾語への翻訳を介した受容と土着化について調査を進めた本年度は、4月から9月まで台湾大学音楽学研究所に滞在して、主に日本統治終了後の台湾における日本の大衆音楽の影響と、近年における双方向的な影響関係

について研究を深めた。具体的には、1)1950 - 60年代の日本曲台語歌謡についての研究、2)1960年代の台湾・日本・韓国・香港・タイで活躍した映画俳優・歌手の林沖氏の聞き取り調査、3)近年の「インディ」音楽シーンにおける「シティ・ポップ」(1970 - 80年代のある種の日本の大衆音楽を指す新たな用語)の流行と日本への「逆輸入」に関する調査、4)近年勃興している台湾のカーニバル文化とそこにおける日本の演奏団体についての調査である。1、2については新聞コラム寄稿や横浜国大での研究会での報告を行った。3については『ユリイカ』誌に論考を寄稿し、既に繁体字中国語訳がオンライン公開されている。4については、2018年6月に北京で開催されるインターアジアポピュラー音楽研究グループ学会で発表した。さらに、従来から行ってきた、フィリピン由来とされるオフ・ビート・チャチャというダンス音楽(日本では「ドドンパ」と呼ばれた)の環太平洋的な拡散について、台湾大学で講演し、国際ポピュラー音楽学会、アメリカ民族音楽学会で発表した。セルビアで「ワールドミュージック」概念に関する国際比較のラウンドテーブルを開催し、クロアチアではディスコ音楽の国際比較に関する論文集の出版打ち合わせを行った(2020年英国で刊行予定)。台北で、コロンビア大学のケヴィン・フェレス氏を招いたワークショップを開催した。また、演歌に関する旧著が英訳されたことをきっかけに、国際的な観点から演歌を再検討するシンポジウムを日本音楽学会で企画し、日本ポピュラー音楽学会では、全国大会の全体シンポジウムにおいて、日本の大衆音楽史観の形成にかかわる報告を行い、その知見を取り入れた論考を『ユリイカ』誌に寄稿した。

最終年度である2018年度は、インターアジアポピュラー音楽研究グループ大会(於・中国伝媒大学、北京市、6月10日)において、アフロ・ブラジル系の音楽を演奏する台湾のカーニバル団体の活動と、そこにおける日本の奏者の指導的役割について、二国間関係にとどまらない、また中心/周縁モデルを逸脱する文化と実践者の流通に注目して発表した。アジア各地(及び世界各地のアジア研究者)のポピュラー音楽研究者と学生が集まる会議において、非常に有効なネットワーキングを行い、7月には、同グループの次期代表である Liew Kai Khiun 氏を大阪大学に招いて講演会と学生によるワークショップを行った。そこでの対話にも触発され、K-POPと日本のアイドル文化の相互作用について、歴史的かつ同時代的に考察する論考を著した。また、以前からの研究主題である「演歌」について、特にその「座長公演」という上演形態について、東アジアの上演文化との関連において再考する報告を台湾で行い、論文として刊行した。本課題の研究によって得られた知見を大いに取り入れた一般向けの講演も複数行っている。

研究期間全体として、世界各地における日本のポピュラー音楽の受容とそこでの「日本」の表象について検討する、という基本的な主旨に合致する、十分な研究成果を挙げ得たと考えている。特に、当初掲げた研究主題がナショナルな枠組みを前提としていたのに対し、各都市を単位とするローカルな音楽文化の環太平洋圏なネットワークという、より開放的かつ具体的な関係性に注目するに至ったことは、今後のさらなる研究のために非常に大きなメリットであったと考えている。そのため、当初の計画と若干異なる点もあるが、本課題は挑戦的萌芽研究であり、当初の研究計画からの若干の逸脱は不可避であり、むしろ研究の性格上望ましいものであると考えている。論文の刊行、国内外での口頭発表といった一般的な活動に加え、本課題の主要な目標として掲げた、世界各地の研究者とのネットワーク形成は、当初期待していた以上に果たすことができた。これを引き継ぐ、より具体的な研究課題として、「環太平洋・間アジア的視点から近代日本大衆音楽史を読み直す」を構想し、科研費(基盤C)に応募し採択された。そのことから、挑戦的萌芽研究としての成果は十分に挙げられたと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

輪島裕介「演歌は「演じる歌」か? : 近代日本における大衆文化と上演文化のミッシング・リンク」、『大衆文化』第20号、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター、19 - 39

頁、2019年、査読あり

輪島裕介「KとJのはざま：「ダンシング・ヒーロー」の越境と架橋」、『ユリイカ』2018年11月号、第50巻15号、青土社、172 - 176頁、2018年、査読なし

輪島裕介「「日本（ニュー）ロック史」の形成とエンケン」、『ユリイカ』2018年1月臨時増刊号、第49巻22号、青土社、154 - 168頁、2018年、査読なし

輪島裕介「日本ポップの自意識とエキゾティシズムの行方」、『ユリイカ』2017年8月号、第49巻14号、青土社、127 - 132頁、2017年、査読なし

輪島裕介「大阪の永六輔」、『ユリイカ』2016年10月号、第48巻14号、青土社、56 - 63頁、2016年、査読なし

他1点

〔学会発表〕(計 16 件)

輪島裕介「アジアとノの日本：日本のポピュラー音楽研究の問題としての『インターアジア』」、『日本ポピュラー音楽学会関西例会、大阪、日本、2018年8月

輪島裕介「環太平洋・間アジア視点から見直す日本ポピュラー音楽史」、『Music Is Music レクチャーシリーズ、東京、日本、2018年7月

WAJIMA, Yusuke, “Making Samba-Reggae Inter-Asian: Japanese Drummers in Taiwanese Carnival Performance”, Inter-Asia Popular Music Studies Group Conference, 北京、中国、2018年6月

WAJIMA, Yusuke, “Latin Music Made in Japan?": The Trans-Pacific Dance Craze in the Late 1950s and the Formation of Dodonpa”, Society for Ethnomusicology, Denver, USA, 2017年10月

WAJIMA, Yusuke, “Soy Source Campur: Rethinking the “World Music Phenomenon” in Japan through the Careers of Hosono Haruomi and Kubota Makoto”, Roundtable, "Voices from the 'East': Cross-cultural aspects of world music scenes in Japan and Serbia" at Faculty of Music, Belgrade, Serbia, 2017年7月

WAJIMA, Yusuke, “Situating Dodonpa Within Transatlantic / Transpacific Contexts”, International Association for the Study of Popular Music, Kassel, Germany, 2017年6月

WAJIMA, Yusuke, “The Fake Sport by the Fake Japanese?: (Trans)nationalism and Americanization in Professional Wrestling in Japan and Korea”, Association for Asian Studies, Toronto, Canada, 2017年3月

他9点

〔図書〕(計 2 件)

宮沢章夫、大森望、泉麻人、輪島裕介、都筑響一、さやわか、NHK「ニッポン戦後サブカルチャー史」制作班（編著）、『NHK ニッポンサブカルチャー史 深堀り進化論』、NHK 出版、2017年、分担執筆

浜口庫之助『ハマクラの音楽いろいろ』、リットーミュージック、2016年、解説

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。